

# 室町時代における將軍第行幸の研究

—— 永徳元年の足利義滿第行幸 ——

桑山 浩然

## はじめに

天皇が皇居から他所へ出行することを「行幸」と呼ぶ。公家社会での行幸はさておき、天皇が武家の棟梁である征夷大將軍第へ行幸するとなると、政権の中心が鎌倉にあった時期にはあり得ず、室町幕府成立以降のこととなる。更に、火災や戦乱を避けての緊急避難的な行幸ではない公式行事<sup>①</sup>「晴儀」としての行幸は、室町時代を通じて変わらずか三度あるにすぎない<sup>②</sup>。足利義滿が康暦の政変を経て文字通り幕府の中樞に座り、一気に公家文化に没入していった永徳元年（一三八二）三月と、権力の絶頂にあり、北山殿（北山山荘）を完成させた応永十五年（一四〇八）三月の二回の行幸、および義滿の息に当たる義教が、永享九年（一四三七）十月、落成したばかりの室町殿へ後花園天皇を招いた行幸である。いずれの場合も、將軍の政治的地位が安定し、いわば絶頂に達している時期であるということに興味があるし、行幸の際の様々な芸能が後代へ大きな影響を残しているという意味でも注目

される。

將軍第への行幸は一世一代という言葉にも当てはまらない程の大きな行事であるということが出来よう。ここでは室町時代に三度行われた將軍御所への行幸のうち、初度の永徳行幸について、その政治的な意味、文化史的な意味を考えてみたい<sup>③</sup>。

## 一 足利義滿の公家社会参入と行幸

天皇を自分の屋敷へ招いた最初の將軍は足利義滿である。室町幕府を開いた足利尊氏は、従来通り鎌倉に政権の中心を置くか、それとも京都に置くかで熟慮の末、京都に幕府を開くことにした<sup>④</sup>。とはいえその後の約半世紀は、内乱状態が続き、武家が公家社会に関わる余裕は到底持ち得なかった。武家が公家社会と密接な関係を持つのは、室町幕府創業の第一世代が退き、新しい世代が台頭するのを待たねばならなかった。義滿は、父義詮が三十八歳で死去の後、十一歳という若さで家督を継いだ。成人するまで約十年間の後見役には、義詮の指名で

長老格の細川頼之が就き、「康暦の政変」といわれる政変で失脚するまで頼之の政治主導は続いた。<sup>(4)</sup>

義満が公家社会に密接な関係を持つようになるのは、「康暦の政変」の四ヶ月前、永和五年（康暦元年、一三七九年）正月七日、白馬節会を見物するために参内したのが最初である。後に、後円融天皇の上臈局三条厳子<sup>(5)</sup>が実家の父親三条公忠へ伝えてきたところによれば、当日の宮中での様子は次の通りであった。

〔後愚昧記〕永和五年（康暦元年）正月

七日、天陰、及晩頭雨下、夜半以後大雨、及黎明休止、夜半許大樹<sup>衣冠</sup>参内、（中略）

後日上臈語云、先於台盤所御対面、其後経黒戸内如執柄入道、参常御所、准后同接此席、盃酌八献、主上御陪膳帥典侍、<sup>四条二位降郷卿女</sup>大樹陪膳五位殿上人等勤仕之云々、三献之時、主上御盃給大樹云々、大樹又未献之時、取主上御盃云々、如此之例未聞之、<sup>未カ</sup>准后并三宝院僧正・二品尼等媒介<sup>仲介</sup>歟、公家武家妃<sup>后</sup>之後、未聞如此例者也、

（説明の便のため史料に書下文を添える。以下同じ）

（前略）夜半ばかり大樹（足利義満）参内す。（中略）後日上臈語りて曰く。まず台盤所において御対面（の儀あり）。その後黒戸を経て執柄入道（摂政関白）の如くに常御所に入る。准后（二条良基）同じくこの席に接す。盃酌八献。主上の御陪膳は典侍、大樹の陪膳は五位の殿上人らこれを勤む。三献の時、主上は御盃

を大樹に給う。大樹、又未だ献ぜざる時に、主上の御盃をとる、と云々。かくの如き例未だ聞かず。准后並びに三寶院僧正・二品尼等の媒介歟。公家武家の（社会）始まる後、未だかくの如き例を聞かざる也。

この日の義満は、まず禁裏の台盤所（控えの間に当たる）で天皇に対面の挨拶をし、その後、入ることは摂政関白にしか許されない常御所（居間に当たる）で二条良基が陪席して盃酌の儀を行った。三献の時には、まず天皇に盃を献じ、その後、に盃を戴くという通常の作法に違い、天皇に盃を献ずる前に盃をとったという。

盃酌の儀におけるこのような振る舞いは、公家社会で最も大切にされる先例の尊重、とりわけ重んじられる天皇に対する時の礼法に反する行動であることは間違いない。白馬節会を見物するといいつながら、実は二十二歳になった義満の公家社会デビューが真の目的であったことを窺わせる。一連の動きを父親に報じている厳子は、今回の参内が公家社会の実力者二条良基、宗教界で影響力の大きかった三寶院光濟、後宮を一手に握っていたかの観がある二品尼（日野宣子）らのお膳立てで実現したせいではないか、と見ているようである。

義満の公家社会への参入は、義満自身の意向と言うよりは、義満を取り巻く人々の思惑が大きく関係していたようである。政治的にも経済的にも勢力を増してきた武家が公家社会へ入ってくることにについては、「公家武家始之後、未聞如此例者也、」という言葉に端的に表れているように、禁裏（天皇）をはじめ公家社会全般としてはあまり愉快

なことではなかった筈であるが、幕府権力の増大によって、それをあからさまに言える状況ではなくなりつつあった。

その後も義満は公家社会への関わりを強めていく。記録に見えると、ころをざっと拾っただけでも次のようになっている。<sup>6</sup>

康暦元（一三七九）・四・二五 賀茂祭見物、

四・二八 参内、

六・一八 禁裏舞楽、義満・御台参内、

七・七 將軍家七夕御楽、

七・二五 右大将拝賀

康暦二（二三八〇）・正・二〇 直衣始、参内、

正・二九 後光厳院七回忌、義満参会、

三・三 禁裏御遊、義満参内、

永徳元（二三八一）・正・七 白馬節会、義満外弁上首を勤む、

正・一三 歳首参内、

三・一 後円融天皇、花亭（義満第）行幸、

白馬節会の見物に参内してから二年後の永徳元年になると、義満は、単に参内して禁中の行事を見物するだけでなく、自ら節会の外弁（げへん）という重い役を勤めるようになる。外弁というのは朝廷の儀式を取り仕切る大切な役目で、大臣が勤める内弁に次ぐ重役である。武家は、公家と同じ官位は帯しているが、公家のことには関わらないという暗黙の

了解があった。義満は、この公武の隔てを乗り越えて、武家でありながら公家の一員として振る舞うようになった。室町將軍が、武家に対してはその棟梁として振る舞うのと同時に、自分の帯する官位権大納言に見合う上級の公家としても活動することは、これ以降よく見られるところである。その先駆けとなる出来事が永徳元年の白馬節会外弁勤仕であったということが出来よう。

義満が主人となって天皇を自邸へ招くという永徳元年の行幸は、以上のような動きを眺めてみれば、義満が公家社会へ参入する総仕上げの行事と評価することができるのではなからうか。

## 二、永徳行幸の史料

永徳行幸の様子は『さかゆくはな』、九条教嗣の『室町亭行幸記』、飛鳥井雅氏の『室町第行幸記』、近衛道嗣の日記『愚管記』などで知ることが出来る。いささか横道にそれる嫌いはあるが、まず史料の概要を見ておく。

『さかゆくはな』は、『群書類従 帝王部』に収められ、最も流布している史料である。群書類従本の底本と思われる内閣文庫所蔵林家本の奥書に、後水尾天皇の信頼が厚かった中院通村（一五八八―一六五三）が禁裏文庫の後柏原院宸筆本を写したとある。現在上巻しか残らず、三月十一日から十六日の行幸全日程のうち、前半の十一、十二日の記事のみが残る。林鶯峯（一六一八―一八〇）は、通村の奥書に続けて「此一帖稀見之、然下巻不足、遺念不少」と書き加え、下巻が残っ

ていないことを残念がつている。当時通常用いられる漢文体ではなく、「増鏡」などと同じ和文で記される。著者は明示されていないが、部外者では目にするのできない禁裏の奥における状況をはじめ、行幸の一部始終について詳細な情報を持っていることを考えると、後述するように、私が行幸の演出者に比定する二条良基を著者に宛てることが出来るかもしれない。

九条教嗣（一三六二―一四〇四）の『室町亭行幸記』は、料紙にして七紙、首部が失われた短い記録である。記主の九条教嗣はこの時二十歳、権中納言右近衛中将従二位である。教嗣は、九条家では勤仕の先例のない行幸に初めて供奉し、近衛中将が勤めることになっている御剣之役という晴れの役目を勤めた。記事は自分の関わった部分を記録することに主眼があり、彼が装束を整え、供揃えして御所へ出仕するところからはじまり、ほかの記録ではあまり見たことのない控えの間に人々がたむろする様子などを叙している。教嗣は天皇に扈從する内侍が捧げ持ってきた宝剣を御輿へ移す御剣之役を勤める。ついで天皇は方違<sup>かたがひ</sup>の形式で行列を組み、京都市中をパレードし、室町亭に到着する。教嗣は御輿の御剣を再び内侍に手渡してこの日の役目を終える。

原本を見ると、一度書いたものの、文字が不明瞭であったり、字画が不正確であった箇所を書き直している。二十歳という年齢を考えれば教嗣にとっては初めて作った記録かもしれない、初々しささえ感じられる記録である。教嗣は相当に準備して役に当たったもののようで、

権中納言左大将徳大寺実時が関白二条師嗣への手紙で、自分も三位中将として初めて行幸に供奉した時、旧記などを当たり準備をして臨んだものだ、教嗣の今度の振る舞いはよかった、とほめていることを伝え聞き、大変に喜んでゐる。

飛鳥井雅氏（生没年未詳）の『室町第行幸記』は、江戸時代には柳原家に伝来していたらしいが、その後所蔵先を変えて、現在は大東急記念文庫に収められている。雅氏は、系図によれば、『内外三時抄』（鎌倉時代後期に成立した蹴鞠の技術を集成した書）の著者として有名な雅有（一二四一―一三〇一）の孫にあたるが、公卿にならなかったせいで詳しい履歴は伝わらない。行幸のほぼ全日程について記事を残し、『さかゆくはな』の下巻が失われているだけに貴重な記録である。まだ翻刻されたものはない。飛鳥井家の家職である和歌と蹴鞠についての記事が多く、三月十四日午後の蹴鞠会と、その夜の和歌御会については特に詳しい記事がある。翌日十五日の和歌御会についての記事もあるが、和歌までは載せない。一方、『統群書類従 和歌部』に収める『永徳元年室町第行幸和歌集』（記主未詳）は、『室町第行幸記』と相補うように、十五日の詠歌と詩御会の漢詩を収める。いずれも記主自身が参列した行事に関する事柄を記したと考えられ、この種の記録作成の動機を窺わせる。

近衛道嗣（一三三二―一三八七）の日記『愚管記』（『後深心院関白記』ともいう）には、日次記の記事の中に行幸の次第を記録している。道嗣が関わった三月十四日と十五日の蹴鞠、および十五日夜の三船の遊

びについて比較的詳しい記事を残している。

これらの史料により永徳行幸の全日程を見ておくと、

三月十一日 行幸の儀、晴御膳、賜杯、

十二日 舞御覧、

十三日 降雨のため内々の酒宴のみ、

十四日 御鞠、和歌御会、

十五日 和歌御会、後宴御鞠、御船遊（和歌、詩歌、管弦、）

十六日 引出物進上、還幸の儀、

となる。以下順次検討していききたい。

### 三 渡御の儀

晴れの儀としての行幸では、まず、禁裏から將軍御所まで天皇の渡御がある。その行列に供奉するため早くから公家たちが御所に集まる。

初めてこのような行事に参加した九条教嗣の記すところによれば、教嗣は、史料の首部が欠けているので時刻は定かにしないが、参内のための装束を着けた後、まず庭へ降り、パレードの際に乘る馬の試乗をする。それが終わって後、屋敷の門前で参内のための行列を組む。

舎人六人が二列に並び前行し、次に自分が乗った車、従者二人に牽かれた馬、乗馬姿の従者数名、家礼（家来）の乗った車と続く。権中納言右近衛中将従二位というそこそこの官位の者であってもこれくらいの行列になる。

教嗣が御所に着いたときには、自分としては少し早めに出仕したつ

もりであつたのに、関白二条師嗣、左大將徳大寺実時、大納言久我具通らはすでに参内していた。台盤所の辺でぶらぶらし、その後黒戸の奥の方で休憩した。端には徳大寺実時や久我具通らが伺候していた。今日の行幸で御剣の役を勤めるようにとの頭弁勧修寺経重からの指示が、八条三位によって伝えられた、などと記している。

公家の日記には禁中の行事に関し事細かに記すものは多いけれども、教嗣の記録のように自分の行動を逐一記すものは少ない。とりわけ儀式が始まる前に控えの間でたむろする人々の様子などは、他の記録で見た記憶のないものである。

申一点というからおよそ午後三時ころ、今日の主役右大將足利義満が参内し、天皇行幸の儀式が始まる。まず召仰（めしおほ）という当日の役を命ずる儀がある。ついで武官として供奉する公家はそれぞれ弓箭を帶ずる。申斜（午後四時近く）、天皇が出座され、天皇が御所を離れる時の儀式、鈴奏（すずのう）（先払いの鈴を賜るよう奏上する儀式）、反閉（はんぱい）（貴人の外出のとき、邪気を祓うために陰陽家が行う呪法）の儀が行われる。ついで諸卿が庭上に立ち並び、御輿が御殿の南階に寄せられる。まず天皇の守り刀が、捧げ持ってきた内侍から御剣の役九条教嗣に渡され、教嗣は、一生懸命に覚えてきた古式に則った作法で、これを御輿に移す。ついで天皇が御輿に乗り、関白が御裾を御輿の中へおさめる。天皇の座が定まったことを見届けてから、左右大將が「おー」と声を挙げて合図をし、御輿の戸が閉じられ、ようやく行列が動き始める。このころには予定時間をだいぶ過ぎていたという。

天皇の通行は多くは夜間に行われるが、今回は晴れの儀式ということで、往路は昼間に行われた。天皇の御輿を中心に、公家、武家が華やかに着飾って供奉するパレードは、文字通り一世一代の見物であった。

天皇の御輿を先導する右大将義満は騎馬姿で、番頭十人、太刀帯二十人が前行し、五尺に余るヒバリ毛の馬に乗る。馬の口取りのほか、さらに三十人ほどの従者が着飾って後に続く。天皇の御輿の周りには中将の位の者がそれぞれ着飾って付き、ついで武官姿の公家が続く。その後には関白以下の公家がそれぞれ薙車しづみぐるまに乗ってお供する。総勢何人になるか分からないような大行列であった。

沿道の様子は『さかゆくはな』に次のように描写されている。

御みちのあいたけんふつのともから垣のとし、あやしのやまかつ、おさめ、みかわやうのものまでもくによりわさとのほりて、みたてまつる、をよそいちしんいて給ふ事たやすからず、千くわん百くわんをととのへらる、たまたまよろつの民もれうかむをはいす、これおほきなるさいはいなり、このゆへに行幸と申とかや、

(御道の間見物の輩垣の如し、怪しの山賤、長女、御厠人よの者までも国々よりわざと上りて、見奉る、凡そ一人出給ふ事たやすからず、千官百官整へらる、たまたま万の民も龍顔を拝す、これは大きな幸なり、この故に行幸と申すとかや、)

庶民が天皇を見る機会など滅多にない。天皇の乗った輿が通り過ぎ

るだけであるが、そんな機会さえ今回のようなケースを除けばないのでこの時代の姿である。怪しの山賤やまがつ、長女むすめ、御厠人みかわうじといった極く身分の低い者までもが競って行列を見に来る、という描写はその辺のことを指している。

パレードは天皇の御所から將軍の御所へ直行するのではない。御所や貴族の屋敷が集中していたという京都の北部をジグザグに練り回るようにコースをとる。『さかゆくはな』によれば、東洞院を南行、中御門を西行、室町を北行、一条を東行、今出川を北行、北小路を西行、室町を北行したという。庶民にとっては見落とせない行事であり、天皇や將軍にとってもこれ以上の見せ場はない。『愚管記』に、方違行幸と触れられていたけれども、大部分の公家が染装束を着ていた、これは二条良基の指図によって義満が決めたことだ、という記事があるところを見ると、本来の方違行幸ならそんな格好をする筈のない派手な衣装で着飾っていたことがわかる。渡御のパレードがいかに意識されていたかをよく物語っている。

もう暗くなつて松明が必要になったころ、室町殿の正門、四足門に到着する。諸卿が立ち並び、雅楽寮の樂人が奏でる樂の中、御輿は中門から南庭に入り、寢殿(正殿)の南階みなはしに寄せられる。九条教嗣が、再び、御剣を輿の中から待機している内侍の手に渡し、天皇は献じられた履物(草鞋)を履いて御輿を降りられる。教嗣は緊張でくたびれはて、早々に御所を退出した、とあるが、この時既に子の刻であったというから、夕方から真夜中に至る長時間のパレードであった。

第一日目の行事はこれで終わるのではなく、衣装を改めた天皇が出御し、歓迎の酒宴が始まる。ホストの義満は天盃を賜り、恭しくこれを受けて、庭へ降りて拝舞を行う。諸人はこぞってその所作を褒めたという。平安、鎌倉時代以来、行われた例の数少ない行幸先で天盃を賜る儀を行ったのは、天皇が亭主を賞翫した証からだ、と『さかゆくはな』は伝えている。行幸は将に政治的な意図で企画されたものであったということができよう。

#### 四、歓迎の芸能プログラム

渡御のパレードと並んで、もう一つの大切な行事が將軍御所で繰り上げられる数々の芸能である。天皇の行幸といっても、その間に執り行われる行事は、対面の儀や盃酌のような儀礼的なやりとりのほかは、貴族達が行っていた芸能が次々に披露されるだけである。しかしながら、今回のように將軍御所への行幸という先例のない行事であつてみれば、天皇が臨席し、多くの人が見物する中で行われる「晴れの儀としての芸能」は、細かく書き留められ、一つ一つの行動が後々同様なことの行われる際の先例とされることになる。どんな芸能が行われたかそれ自体さえもが、それを守り伝え、いわば家職としてきた家にとつては大問題になりうる。万人が注視する中で繰り上げられる芸能は、参加者にとっては文字通り一世一代の晴舞台となった。

ところで、永徳行幸のプログラムには一つの先例らしきものがある。「鎌倉中期にあつて、王朝世界を正當に繼承していた集団——宮中・

院および西園寺家——の最大規模の雅会」(井上宗雄<sup>8)</sup>)とも評される弘安八年(一二八五)に行われた北山院の九十賀宴である。

北山院というのは、鎌倉時代後期の公家社会における一大権力者、後嵯峨院の義母に当たる人物、中宮大宮院の母(西園寺実氏の室)のことである。後深草・龜山両天皇には祖母に当たり、鎌倉公家社会のゴッドマザーとも称しうる人物である。その北山院のしかも当時ではきわめて稀な九〇歳の長寿を祝う賀宴であつた。自伝的な文学作品『とはすかたり』を書き残した女性、後深草院二条(久我雅忠女)は、実際にこの宴に列なつており、盛儀の様を克明に書き残した。『増鏡』の中にも相当の紙幅を割いて記事があり、文章の類似から、この部分は『とはすかたり』を下敷きにして作られたものとされている。現在残る『北山准后九十賀記』(滋野井実冬記、未刊)をはじめ、『増鏡』の記述などから考えると、この他にも今は伝わらない多くの記録が作られたものと考えられ、鎌倉時代の公家社会では有数の行事であつた。その北山院九十賀宴のスケジュールは、

二月二九日 西園寺行幸

二月三〇日 舞樂

三月一日 御遊(管弦) 和歌御会 蹴鞠  
というものであつた。

西園寺というのは、鎌倉公家社会の第一人者西園寺氏の邸宅があつた場所で、後年、足利義満は荒れていたその跡地を譲り受け、時代の呼称ともなる北山山荘を造営することになる。

二日目以降のスケジュールでは、古くからある舞楽、管弦や和歌のほかに、鎌倉時代に入ってから公家社会に定着、普及することになる蹴鞠が行われていることは注意しておいてよいだろう。

永徳元年行幸の際も

三月十一日 行幸の儀、晴御膳、賜盃、

十二日 舞御覧、

十四日 御鞠、和歌御会、

十五日 和歌御会、後宴御鞠、御船遊（和歌、詩歌、管弦、）

となっていて、和歌と舞楽や管弦、それに蹴鞠という構成は変わらない。

蹴鞠は院政期ころから公家社会に普及し、鎌倉時代初期になると、源頼家や実朝らもこれを習い、京都の公家だけでなく鎌倉の武家社会にもある程度は普及していたと考えられる。とはいえ、戦乱が続く南北朝の時期には武家が蹴鞠をしたという記録は見あたらない。永徳行幸の時に蹴鞠を行ったのは、足利義満を除けばいずれも公家である。武家社会ではほとんど普及していないにも関わらず、二条良基は、北山院九十賀宴で晴れの行事とされた蹴鞠を十分意識しながらプログラムを作ったのであろうと想像される。良基は、『増鏡』で大きく描くあこがれの王朝絵巻を、天皇の行幸という機会をとらえて足利義満によって再現しようと図っていたのではないか、と言うことが出来ようし、義満もまたよくそれに答えていたのであった。

## 五、蹴鞠と舟遊び

芸能の開幕は十二日の舞御覧である。ただこの行事については、諸記録が誰がどの楽器を受け持ったかを記録する程度で、それほど詳しくは伝えていない。いつも通り出席者がそれぞれ管と弦の楽器を担当し、打楽器は地下身分の楽人が受け持って、雅楽が奏され、舞が披露されたものであろう。『さかゆくはな』は、天皇から「今日のまひ、れいよりも（心に）しみておもしろきよし」のご沙汰があったと伝える一方、翌日予定されている蹴鞠の準備を急ぐようにと指示された、とも記し、形通り運ばれたが、それほど大きな盛り上がりはなかったもののように見える。

蹴鞠は十四、十五日と二日続けて行われている。十四日は公式行事であつたらしく、故実に則って執り行われた。午一点というから正午過ぎに、飛鳥井雅氏は御所へ参った。近衛道嗣は申刻（四時過ぎ）に御所へ参仕した。身分の高い者はゆつくり出仕するのが例なのである。参加者一同は参集したが、上鞠の役を勤めるはずの御子左大納言為遠一人が遅参し、なかなか会を始められない。上鞠というのは会最初に鞠を蹴り上げる役のことである。蹴鞠の故実でも特にうるさくいわれるもので、その役に当たるものは、技量の熟達度と共に、名誉な役ということで、年齢や家柄も考慮されて選ばれる。御子左家は藤原定家の子孫で、二條家ともいわれる。鎌倉時代以来和歌と蹴鞠を家の芸としてきた由緒がある。同じく蹴鞠を家芸とする難波、飛鳥井両



家よりは上位に位置づけられてきたせいであろう、今回の上鞠は御子左為遠が勤めることになっていった。その御子左がなかなか出仕しないのである。二条良基はホスト役の足利義満が上鞠の役をするように慫慂するが、遠慮して辞退するため、会の開会は遅れに遅れた。

会が始まったのは酉一点（六時ころ）とあるから、もう宵闇が迫ったところである。それでも作法通り前座に当たる賀茂社社人が勤める露払いの鞠が行われ、桜の木の枝に結びつけて鞠場に運び込まれた鞠を枝から解く解鞠、鞠場に鞠を置く置鞠の儀が行われ、ようやく御子左為遠の上鞠が行われた。その所作も何ら見るべきところがなかったとされている。為遠はこの後八月には亡くなるので、あるいは病氣など体調が悪かったのかもしれないが、それにしても故実を守るためにはそんな人でも出仕させなければならないところがこの時代の意識であった。

その後本格的な蹴鞠が行われる。この時には、前関白近衛道嗣の目配せで、飛鳥井雅氏が上鞠を勤めた。為遠は形ばかり一足、二足蹴り、すぐに退く。誠に興ざめなことだったとある。その後も二条為重が鞠を踏むような不作法もあり、暗くなったので早々に会を切り上げた。近衛道嗣も「堪能の仁なし、その興なし、無念」と記している。盛り上がるに会であったようである。

近衛道嗣が下がるうとしていると、義満が近寄ってきて、今日の蹴鞠は日暮れになってしまつて、ほんの一、二足しか蹴れなかった。残念だから明日もう一度やろう、早く出仕してくれ、という。道嗣は承

知し、翌日の昼過ぎに出仕した。このころ天皇はまだお休み中で、しばらく待機し、申半刻（三時ころ）蹴鞠が始まったとある。飛鳥井雅氏は、前日蹴鞠の会の後で催された和歌御会を終えて辰刻（八時ころ）御所を退出しようとしていると、按察使中納言裏松資康に呼び止められ、蹴鞠をやるので出仕するようにいわれた。一度御所を退出し、装束を改めて再度出仕した、という。

これで見ると、行幸の際の行事は、先例、先例とうるさくいわれる割には臨機の対応もできたようである。もともと十五日の会には天皇の出座はなかったようであるから、内々の会ではあっただろうけれども、上位の者、この時にはホストの義満が言い出せばその場でことが決まったようである。それに義満が公家世界で行われていた蹴鞠にはまりこんでいる様子が窺われ、このこともまた義満を考える材料になるかもしれない。

近衛道嗣が蹴鞠を終えて退出しようとしていると、また義満が近寄ってきた。義満は、今日の道嗣の蹴鞠のことをあれこれ批評し、夜に舟遊びがあるから再度御所へ返ってくるようにという。舟遊びはまた三舟の遊びともいわれる。その昔、大堰川に舟を三艘浮かべ、それぞれを詩（漢詩）、和歌、音楽の舟として、いづれでも自信のあるものに乘るよう指示し、芸能の技を競ったという故事に倣ったものである<sup>10</sup>。ここでは御所の池に三艘の舟を浮かべ、篝火で照明し、朗詠や音楽をする遊びである。もともと今回は、近衛道嗣の様な飛び入り組を別にすれば、あらかじめ誰がどの舟に乗るかは指示されていたようである。

雲一つない満月のもと、明滅する篝火で劇的な効果を盛り上げながら、自慢のどや楽器の腕を競い合ったものであらう。舟の乗り手は行き来していたらしく、天皇はじめ和歌の舟に乗ったのが、次には管弦の舟に乗り、龍笛を吹かれたという。貴族の教養としていずれの芸能にも堪能であることが求められ、とりわけ天皇は何をやっても第一人者であらねばならなかった。それが貴族であり、天皇である。

この夜の舟遊びは大変盛り上がったようで、道嗣は日記に「明月蒼々、更に煙霞の隔てなく、感興比類なし、後代（までの）の美談なり」と記している。義満にとつても今回の行幸中でもっとも印象深かったのはこの舟遊びであつたのであらう、後に近衛道嗣に馬と太刀を引き出物として届けて喜びを分かち合っている。

## 六、還御の儀——行幸の意味するところ——

十六日は還幸の日、終日酒宴が続き、還御は十七日未明になつてしまつたという。それに先立ちホストの義満から引き出物が贈られ、天皇からはお返しとして義満の女房や近臣たちへ家賞と称する贈位の儀がある。義満からの引き出物は義満の権威を見せつけるかのような豪華なものである。天皇に対しては御服百重、砂金百両をはじめ、錦欄、唐絵、香炉、建蓋といった工芸品、豹や虎の皮という珍品、それに馬十疋、このほか天皇の寝所に置かれていた錦欄の夜具、沈の枕、平鞆の太刀など、このほか上臈の女房には織小袖五重ずつ、下臈の女房にそれぞれ三重ずつ、それに二つきぬの袴が贈られた。

後の例を見ても、自分の屋敷に貴人を招いた時には豪華な引き出物を用意するのが例で、ともすれば一夜の宿のために殿舎を建て、豪華な夜具を調べ、帰りには莫大な引き出物と共に身の回りの品すべてを贈るのが通例であつた。今回は先例のない天皇の將軍御所への行幸である。義満は、武家であつても公家と同様の教養を身につけた人間であることを見せつけ、それと同時に莫大な贈り物を用意できる経済力を持つてゐることを顯示した。

多分に二条良基をはじめとする義満を売り出そうとする側近によるところが多いとはいへ、今回の將軍御所への天皇の行幸は、足利義満の公家世界へのデビューが完成したことを示し、と同時に、足利義満が公家の世界でも天皇に勝る権力を振るう前触れであつたであらう。この後義満は公武両世界で絶大な権力を振るうことになり、足利義満を抜きにしては何事も始まらず、何事も語り得ないことになった。

### 註

(1) 『群書類従』はその巻四〇に収める『永享九年十月二十一日行幸記』に続けて「行幸勸例」なるものを掲げ、室町時代における行幸の例を列記している。本来の『永享九年十月二十一日行幸記』にはどの写本にも見えない記事で、恐らく群書類従の編纂者堀保一が作つたものである。

(2) これまで行幸の研究、とりわけ今回取り上げた將軍御所への行幸のそれとなると、専論はないというべきであらう。佐藤豊三「將軍家「御成」について——室町將軍家の御成——」（徳川黎明会『金鯉叢書』創刊号、

一九七四年）、二木謙一『中世武家儀礼の研究』（吉川弘文館、一九八五年）は武家故実を扱った中で將軍の出自を論じ、また、將軍御所の建築史的研究を行った川上貢『日本中世住宅の研究』（墨水書房、一九六八年第二刷）、および後宮における女房の居所に関連して御所の構造を論じた桑山「三条公忠女殿子の後宮生活」（女性史総合研究会『女性史学』一一号、二〇〇一年）が関連論文として注意される程度である。

(3) 建武三年一月の建武式目は、その冒頭に「鎌倉元の如く柳營たるべきか、他所たるべきか」（原漢文）の一条を置き、新しい幕府の所在地がこの段階では鎌倉である可能性もあったことを示している。

(4) 義満の將軍職継嗣については、『愚管記』貞治六年十一月二六日条に、二代將軍足利義詮の病が重くなり、政務を息義満に譲り、細川頼之を執事としたことが見える。

(5) 三条公忠女殿子の入内とその後については、桑山「三条公忠女殿子の後宮生活」（前掲）参照。

(6) 煩瑣にわたるので逐一の典拠史料は省略する。『史料綜覧 卷七』（東京帝国大学、一九三二年）の各年次を参照。

(7) 本稿はもっぱら先に掲げた史料で考察する。史料が限られているので、個々の叙述に関しては逐一典拠を掲げない。一部未刊史料を使っており、史料の確認をできない箇所があるが、史料全文の翻刻を掲載する場ではないので、了解を得たい。

(8) 井上宗雄訳注『増鏡（中）』（講談社学術文庫、一九九二年第七刷）三二九頁、「老の波」の段の解説。

(9) 御子左為遠（一三三九～八一）は、『平生大飲過法人』（『後愚昧記』

永徳元年八月二七日条）と評され、將軍義満の不興を買うのも再三であった人物である。なお、渡辺融・桑山『蹴鞠の研究』（東京大学出版会、一九九四年）一五〇頁参照。

(10) 『古今著聞集』卷五「御堂関白道長大堰川遊覧の時詩歌二船の事並びに公任和歌の船に乗る事」「白河院大井河行幸の時帥民部卿経信三船に乗る事」など。

#### 【史料】

『さかゆくはな』Ⅱ『群書類従』卷三九、帝王部、所収。同書は『永徳行幸記』（内閣文庫所蔵林家本、「林之蔵書」「浅草文庫」の蔵書印あり）が底本であったと考えられる。

『室町亭行幸記』Ⅱ『永徳元年三月十一日室町亭行幸記』（宮内庁書陵部所蔵九条家本）、『圖書寮叢刊 九条家歴世記録Ⅱ』（宮内庁書陵部、一九八九年）所収。なお、本書の閲覧に際しては宮内庁書陵部図書課櫻井彦氏のご配慮にあずかった、お礼を申し上げたい。

『室町第行幸記』Ⅱ『原本大東急記念文庫所蔵、未刊。同書の伝来などについては、桑山「原本の魅力（二） 桜町上皇女房奉書」（三田中世研究会『年報三田中世史研究』二号、一九九五年）を参照。

『愚管記』Ⅱ『近衛道嗣の日記。「後深心院関白記」ともいう。』『文科大学史誌叢書』およびそれを復刻した『続史料大成』所収。東京大学史料編纂所『大日本古記録』にも「後深心院関白記」の書名で収められるが、本稿で利用する年次は未刊。本稿は『続史料大成』（臨川書店、一九六七年）によった。

『後愚昧記』 三条公忠（一二三四～八三）の日記。息女の嚴子（通陽門院、一三五～一四〇六）は時の後円融天皇の上臈局として入内している。日記には嚴子を通じてもたらされた宮中の動向が記され、足利義満時代の公武関係を考える史料として貴重である。『大日本古記録 後愚昧記 一～四』（東京大学史料編纂所、一九八〇～九二年）による。

（本学教授・国史学）